

くもの悲しみ・わたしの悲しみ 八木重吉「雲」の語用論的分析

高 本 條 治*
(平成9年4月30日受理)

要 旨

八木重吉の詩集『秋の瞳』に収められた詩「雲」は、解釈が曖昧となるような語彙統語特性を有している。学生の解釈にどのようなばらつきがあるのかを授業の中で調査してみると、学生は擬人化解釈と非擬人化解釈の両方をとるという事実がわかった。また、学生の中には、第1連には擬人化解釈をとりながら第2連には非擬人化解釈をとる(あるいはその逆)というような折衷的な解釈を行った者もいた。

小論では、この詩の解釈に関する調査結果をもとにして、この詩の解釈可能性の広がりを支えている機構について語用論の観点から記述する。その記述を通じて、解釈可能性と解釈優先度のせめぎ合いという、語用論にとって重要な問題を議論することになる。

KEY WORDS

interpretive potentiality 解釈可能性
personification 擬人化解釈

interpretive priority 解釈優先度
parallelism 平行性解釈

1. 詩「雲」とその解釈調査結果

私は、解釈の可能性と優先度のせめぎ合いの問題は、語用論にとって重要な研究課題であるという自覚に立ち、この問題に関する事例分析を継続的に行っている¹⁾。小論もそのような研究計画の中に位置づけられる²⁾。

Grundy (1995: 175) は、言語使用の語用論的特性として、(1)「適切性(appropriacy)」, (2)「間接性(indirectness)」, (3)「不確定性(indeterminacy)」, (4)「関連性(relevance)」を挙げている。解釈可能性の広がりをもとにするということは、言語理解の不確定性を論じること他に他ならず、この特性は処理すべき言語表現の間接性が高い場合ほど顕著である。また、解釈の優先度について問題にするということは、言語理解の適切性について論じること他に他ならず、この特性は解釈主体の処理労力と認知効果との相対関係で決定される関連性と常に密接な関わりをもっている。このように、解釈の可能性と優先度は、語用論的な観点から問題にしうる。

ここでは、29歳で夭折した詩人・八木重吉³⁾が残した「雲」という詩を分析資料として取り上げ、その解釈の可能性と優先度について語用論的な観点から分析を行う。分析資料とする詩「雲」は、次の通りである⁴⁾。便宜上、①～④の行番号を付した。

* 言語系教育講座

(1) 雲 八木重吉

- くものある日 ①
くもは かなしい ②
くもの ない日 ③
そらは さびしい ④

平明なことばで書かれた短い詩であるが、この詩には解釈上の曖昧性が潜んでおり、そのため一定範囲で解釈可能性の広がり認められる。例えば、この詩の②行目「くもは かなしい」を取り上げて、「かなしい」という思いをいだいている主体について学生に尋ねると、その答は複数に及ぶ。④行目の「そらは さびしい」についても同様のことが言える。

そこで、②行目の「かなしい」、④行目の「さびしい」の解釈について、私の授業を受講している学生を対象にして調査⁵⁾してみたところ、集計結果は表1のようになった。

表1を見てすぐに気づくことは、次の二点である。

- (2) a. 八木重吉の詩「雲」に対する解釈は一通りだけではなく、一定範囲で解釈可能性に広がり認められること。
b. それらの解釈のうちには、数の上で優勢なものと劣勢なものとの別、すなわちある種の解釈優先度の差が認められること。

表の内容をもう少し詳しく見てみよう。②行目の「かなしい」の感情主体を「私」ないしは

		「かなしい」という感情の主体						合計数
		私	雲	雲と私	空	太陽	蜘蛛	
「さびしい」という感情の主体	私	73 (42.4)	15 (8.7)	-- (--)	3 (1.7)	1 (0.6)	-- (--)	92 (53.5)
	空	24 (14.0)	49 (28.5)	-- (--)	-- (--)	-- (--)	2 (1.2)	75 (43.6)
	空と私	2 (1.2)	-- (--)	2 (1.2)	-- (--)	-- (--)	-- (--)	4 (2.3)
	雲	1 (0.6)	-- (--)	-- (--)	-- (--)	-- (--)	-- (--)	1 (0.6)
	合計数	100 (58.1)	64 (37.2)	2 (1.2)	3 (1.7)	1 (0.6)	2 (1.2)	172 (100)

表1 「雲」の解釈に関する調査結果（太数字は度数，括弧内は百分率）

「雲」とした学生は全体の 96.5%に及び、④行目の「さびしい」の感情主体を「私」ないしは「空」とした学生は 99.4%に及ぶ。学生の解釈は、おおむねこの範囲の中に分布していることがわかる。しかし、一部の学生はこれとは異なった解釈も見せており、「かなしい」の感情主体を「空」「太陽」「蜘蛛」のように解釈したり、「さびしい」の感情主体を「雲」であると解釈したりする者がいた。

数の上では、「かなしい」「さびしい」という感情をいただいている主体として、どちらも「私」であると解釈した学生⁹⁾の比率が最も高く 42.4%を占める（以下、これを《私-私》型と仮称する）。次いで多いのが「かなしい」の感情主体を「雲」、「さびしい」の感情主体を「空」であると解釈した学生で 28.5%（《雲-空》型と仮称）。以下、「かなしい」の感情主体を「私」、「さびしい」の感情主体を「空」とする《私-空》型が 14.0%、「かなしい」の感情主体を「雲」、「さびしい」の感情主体を「私」とする《雲-私》型が 8.7%と続く。

第 1 連と第 2 連との間で平行性解釈をとっているか否か、また、第 1 連・第 2 連のいずれかに擬人化解釈をとっているか否か、という観点で、上位 4 つの解釈タイプの集計結果をあらためて分類整理してみると、表 2 のようになる。

この上位 4 つの解釈タイプのうち、数量的に優勢であった第 1 位の《私-私》型と、第 2 位の《雲-空》型は、この詩の第 1 連に対する解釈の仕方と、第 2 連に対する解釈の仕方とに平行性が認められる点で、「平行性解釈」という解釈特性を共有している。それに対して、《私-空》型と《雲-私》型は、「非平行性解釈」とをとっている。つまり、数の上だけで言えば、平行性解釈の方が、非平行性解釈よりも優勢だということになる。この平行性解釈の優位性を巡る問題については、第 2 節で述べることにしたい。

一方、「かなしい」の感情主体を「雲」、「さびしい」の感情主体を「空」と捉える解釈の仕方は、「擬人化」に基づくものである。上位 4 つの解釈タイプのうち、数量的に第 2 位であった《雲-空》型は、第 1 連にも第 2 連にも「擬人化解釈」を適用した解釈になっている。それに対して、最も優勢だった《私-私》型は、第 1 連にも第 2 連にも「非擬人化解釈」とをとっている。残る《私-空》型と《雲-私》型は、第 1 連と第 2 連のいずれか一方に擬人化解釈をとり、他方に非擬人化解釈をとっていることになる。擬人化解釈の特性、《私-私》型の非擬人化解釈の優位性を巡る問題、ならびに、擬人化解釈と非擬人化解釈が併存していることの意味については、

	平行性解釈	擬人化解釈		百分率
		第 1 連	第 2 連	
《私-私》型	○	×	×	42.4%
《雲-空》型	○	○	○	28.5%
《私-空》型	×	×	○	14.0%
《雲-私》型	×	○	×	8.7%

表 2 平行性解釈／擬人化解釈という観点による分類

第3節以降で述べたいと思う。

2. 平行性解釈の優位性

この節では、平行性解釈をとる《私—私》型と《雲—空》型が優勢である理由について考察する。言うまでもなく、その最大の理由は、「雲」という詩が有する表現形式上の平行性に求められる。この詩は2連から構成されており、第1文(①②)が第1連を、第2文(③④)が第2連を構成している。次に示すように第1文と第2文とは、明らかに平行的な形式をもっている。

- (3) ①くも の ある 日 ②くも は かなしい (第1文)
 | | | | | | |
 ③くも の ない 日 ④そら は さびしい (第2文)

しかも、第1文と第2文とに見られる語彙項目の違いは、意味的にそれほど大きく隔たったものではない。①の「ない」、③の「ある」は、形容詞と動詞の差こそあれ、対義的な意味関係に立つ語彙項目であるし、②の「くも」、④の「そら」は、近接的な意味関係をもつ名詞である。また、②の「かなしい」、④の「さびしい」は、どちらも心の痛みや晴れやらぬ思いと結びついた類義的な意味関係をもつ形容詞である。

語彙統語構造の平行性は、表意⁷⁾の解釈過程に、平行的な処理をもたらす。例えば、①・③とも、「くもの」の助詞「の」は連用の格助詞で、「くものある日」「くものない日」は、「くもがある日」「くもがない日」と言うのと意味的には同等である⁸⁾。このとき、「くもが[どこに]ある」のか、「くもが[どこに]ない」のかを想定するとする。これは、雲というものについての一般的知識から言っても、また、④に「そら」という表現が出てくることから言っても、「くもが[そらに]ある」、「くもが[そらに]ない」というように、①と③とで平行的に想定されるだろう。

また、①「くものある」日」と③「くもの ない」日」は、どちらも「日」という名詞が連体節によって修飾された構造であるが、「くものある日」「くもの ない日」はそれぞれ「くもは かなしい」「そらは さびしい」に対する状況的な連用修飾語として機能している。そのことを明確化するため、①に対して「くものある日 [には]」というように助詞を敷衍的に想定するとするならば、ほぼ自動的に③に対しても「くものない日 [には]」というように、平行的な想定が行われるはずである。

このように、言語コード解読の結果認識された語彙統語構造上の平行性は、表意の解釈処理にも平行性を引き起こし、その結果として、平行性解釈がもたらされやすくなる⁹⁾。だとすれば、②「くもは かなしい」と④「そらは さびしい」についても、特に解釈上の障害がない限りは、平行的な表意解釈が行われやすいことが予想される。重要なのは、そうすることが解釈処理上、労力の軽減になるという点である。なぜなら、表現形式が平行性を示しているのに、あえて非平行性解釈をとるということは、第1文と第2文とに別の解釈処理パターンを適用するということであり、それだけ余剰な処理労力が必要になるからである。そのような余剰な労力がかかる処理は、平行性解釈だとしてもどうしても整合的で一貫した解釈が見込めない判断される場合や、あえて平行性解釈をキャンセルすることで高い代償効果が得られる見込みが大きい場

合以外には、選択されにくいはずである。この詩について平行性解釈が優勢である理由はここにあると考えられる。しかし、それでも、なぜあえて非平行性解釈をとる読み手がいるのかという問題は依然として残る。

そこで私は、《私一空》型や《雲一私》型の非平行性解釈を選択した学生39名（《私一空》型：24名、《雲一私》型：15名）に、「なぜ平行性解釈を採用しなかったのか」を追跡調査してみた。学生から返ってきた答はかなり興味深いものであった。「最初は『くも』も『そら』も擬人化されているのかもしれないという気がしたが、その解釈ではうまくいかなかったので修正した」というような理由を述べた学生が、39名中23名いたのである。これは、《私一空》型や《雲一私》型の解釈をした学生のうち、過半数の者が、《雲一空》型解釈の可能性をまず吟味してみたということを示している。

《私一空》型の解釈をした学生24名のうち、《雲一空》型の解釈をキャンセルした学生は13名で、キャンセルの理由として次のような点を挙げた。

- (4) a. ①「くものある日」、③「くもの ない日」の「ある」「ない」は、物や植物にしか使えないと思ったから、「そら」だけが擬人化されていたとした。(9名)
 b. 最初、①行目の「くも」、②行目の「くも」、③行目の「くも」が同じ「くも」だと考えたが、だとすると、なぜ自分自身が「ある」ときに「かなしい」のかがよくわからなかったから、「そら」だけが擬人化されていたとした。(3名)
 c. ①行目と③行目の「くも」は同じ雲で、②行目の「くも」だけが擬人化された雲だと考えたが、それだとどうしても一つのイメージにまとめられなかったから、「そら」だけが擬人化されていたとした。(1名)

一方、《雲一私》型の解釈をした学生15名のうち、《雲一空》型の解釈をキャンセルした学生は10名で、その理由として、すべての学生がほぼ同じ説明を行った。

- (5) 「くも」は実体があって動き回れるので擬人化になじむが、「そら」は背景みたいなもので擬人化にはなじまないから、「くも」だけが擬人化されていたとした。(9名)

「くも」に比べて「そら」は擬人化しにくいから、《雲一私》型の非平行性解釈をとった、という説明である。確かに、漫画や絵本の中では、雲がしばしば擬人化されたキャラクターとして描かれている。幼い時期から、そういう擬人化された雲の絵柄に親しんできた学生ほど、この詩の中に出てくる「くも」に対しても、擬人化解釈をとろうとする傾向が強くなるというのは理解できることである。

さて、これらの学生の証言は、二つの点で興味深い。一つは、《雲一私》型・《私一空》型の非平行性解釈をとっている学生の多くが、解釈の入口では《雲一空》型の平行性解釈を試しているという点である。つまり、平行性解釈をキャンセルした結果として、非平行性解釈が導かれているのである。だとすると、この「雲」という詩に対して読み手が最も思いつきやすい解釈は、やはり、この詩の形式上の平行性を契機にしてもたらされる平行性解釈であると言えるであろう。

もう一つは、最初に思いついた《雲一空》型解釈がうまくいかなかった場合の軌道修正の仕方である。《雲一空》型から《雲一私》型・《私一空》型に移行した学生は、平行性解釈をキャンセルすることで、擬人化解釈を部分的に保持しようとしていることになる。

逆に、擬人化解釈をキャンセルして《私一私》型の平行性解釈に移行することもできたはずであり、第4節で述べるようにその方が解釈処理に要する労力負担は少なく済む。また、形

式上明白な平行性をもつこの詩の場合、わざわざ非平行性解釈を持ち出すというのは、処理コストという観点から見ると余分な労力を費やすことになる。それにも関わらず、《雲—私》型・《私—雲》型の解釈を行った学生は、平行性解釈の方をキャンセルして、擬人化解釈の方を保持しようとしたのである¹⁰⁾。

擬人化を行わなくても表現や解釈が十分可能であるのに、むやみに擬人化を適用する傾向は、しばしば「感傷の誤謬(pathetic fallacy)」という用語で呼ばれている。この用語は、1856年に出版された *Modern Painters, III* の第12章“Of the Pathetic Fallacy”の中で、John Ruskin が使った用語である。Ruskin はこの用語によって、無生の事物や自然物に対して、人間感情という属性を安易に与える擬人化手法の横行を非難し (Wales 1989: 342)、それによって、自然が人間と同じ感情をもっていると信じる傾向(擬人主義 anthropomorphism) が顕著であった当時の詩人や美術家たちの世俗的な感傷主義を攻撃した (Preminger 1986: 188-9)。Ruskin によれば、この誤謬は、人を多かれ少なかれ非理性的にさせる興奮した感情状態に起因するもので、情動につき動かされたときに心が陥る誤り(error)であり、また、外部の事物に対するすべての印象のうちで偽り(falseness)とされるものであると述べて、「感傷の誤謬」を徹底的に攻撃している。

八木重吉の詩「雲」に対して、《私—空》型や《雲—私》型の非平行性解釈を行うことは、この詩に語彙統語構造の平行性がたやすく観察されることから見て、いささか変則的な解釈であると言ってよいであろう。しかも、この解釈をとった学生の半数以上が、この解釈は、最初に思い浮かべられた《雲—空》型の擬人化解釈に対する代案として作り上げられたと証言している。確かに、この詩に限らず、詩の解釈をする場合に、擬人化解釈や象徴化解釈をもつばら重視しようとする選好や偏倚をもつ学生は少なくない。もしかすると、それは学校教育の中で培われてきた傾向性なのかもしれない。もちろん、それをいきなり「感傷の誤謬」だと断罪するつもりはないが、解釈バイアスの問題として、今後の調査課題の一つにしていきたいと私は考えている。

3. 擬人化解釈

本節では、次節で「非擬人化解釈の優位性」を考察するのに先立ち、擬人化という表現特性ならびに解釈特性について概観しておきたい。

人間以外の動植物や、無生(inanimate)の事物や現象、あるいは抽象概念などを示す言語表現を、人間属性(なにかんづく人間の心的能力に関わるような属性)が要求されるような語彙統語構造の中で使用して、その言語表現に結果として臨時的に人間相当の属性が付与されたような解釈を引き起こす表現特性や解釈特性を、一般に「擬人化」「擬人法」(personification)と呼んでいる。伝統的な修辞学では‘prosopeia’とも呼ばれ¹¹⁾、次のように定義されている。

- (6) a. 「無生物や抽象概念を生物扱いしたり、感情など人間特有の性質を持つものとして表現する表現技巧」(大塚ほか 1982: 865)
- b. 「抽象的な概念や無生物(および動植物)を、具体的で生命をもった人間になぞらえ、それによって表現を生き活きとさせる修辞法」(田中 1988: 484)
- c. 「動物や無生の事物を人間属性をもつものとして表現したり、あたかも人間であるか

のように、そのものに話しかけたり、そのものに話をさせたりすること」(Lanham 1991: 123)

- d. 「人間主体の特性が非人間事物に転移(transfer)されている」(MacLaughlin 1995: 83)

本来人間扱いできないものに、人間としての語彙統語的な臨時属性を付与した擬人化表現は、語彙統語規則から見れば言語形式としてつじつまの合わないものであり、隠喩と同じく、語彙統語的な制約条件を破った逸脱表現(deviant)となる(Wales 1989: 342)。Leech (1969: 158) は、字義通りの意味と文彩の意味との相互関係から、主要な隠喩のタイプを次のように四分類しているが、そこでは擬人化は隠喩の範疇の中に包含されている。

- (7) a. 具象化隠喩(concretive metaphor)……抽象的なものに具象性や物質性を属性として付与するもの(例: 'the pair of separation', 'the light of learning' など)。
 b. 有生化隠喩(animistic metaphor)……無生のものに有生特性を属性として付与するもの(例: 'an angry sky', 'grave yawned' など)。
 c. 人間化隠喩(humanizing metaphor)……「擬人化隠喩(anthropomorphic metaphor)」とも。人間でないものに人間性を属性として付与するもの(例: 'this friendly river', 'laughing valleys' など)。
 d. 共感覚化隠喩(synaesthetic metaphor)……感覚的知覚のある領域から別の領域に意味を転移させるもの(例: 'warm colour', 'dull sound' など)。

このうちcが擬人化に相当するのは明らかであるが、Leechによれば、a・b・cの3カテゴリーは互いに重なり合うものとされている。というのも、人間であることは有生であることを前提にし、有生であることは具象であることを前提にするからである。Leechは、'Authority forgets a dying king' という例を挙げ、この例のように抽象的なものを人間として文彩的に表現するタイプの擬人化の場合には、この3つのカテゴリーのすべてが結びついているのだと述べている。

また、Leechは、cの隠喩、すなわち、人間化隠喩の特徴を次のように言い表している。

- (8) 人間化隠喩……自然の世界を私たちの内面に認められる諸特性に投射(project)するとき、世界は私たちにとってより現実味を帯びてくる。

このうち、「自然の世界を私たちの内面に認められる諸特性に投射する」という捉え方に注目したい¹²⁾。この捉え方は、(6) dに引用したMacLaughlin (1995)による、「人間主体の特性が非人間事物に転移されている」¹³⁾という擬人化の定義とも、よく似ている。両者を接合すれば、擬人化とは、非人間事物を人間特性に「投射」し、そうすることによって、人間特性が非人間事物に「転移」という解釈的機構だということになる。

語彙統語規則を逸脱している擬人化表現に対して、筋の通った解釈が可能なのは、この投射や転移という機構のおかげであると言えよう。擬人化表現が語彙統語的な制約条件の逸脱の上に成り立っている以上、投射や転移が語彙統語的次元の問題でないことは明らかである。それは、必然的に語用論的次元の問題であると見なさざるをえない。

なお、ここで注意が必要なのは、表現特性としての擬人化と、解釈特性としての擬人化とが、常に一致するわけではないということである。(6) a・bとして引用した'personification'の定義からもわかる通り、一般に「擬人化」「擬人法」は、文彩的な「表現技巧」ないしは「修辞法」とされるのが普通である。しかし、一定の表現特性が常に一定の解釈特性と対応するわけでは

ない。

小論で問題にしている「雲」という詩に即して考えてみると、この詩に対する最も優勢な解釈が《私-私》型の非擬人化解釈である以上、すべての読み手がこの詩に擬人化という表現特性を読み取っていると断言することは困難である。ただ、その一方で、学生に対する調査結果からも明らかなように、解釈可能性の一つとして擬人化解釈が選択されうるということも事実である。このように、表現特性としての擬人化と、語用論的な解釈特性としての擬人化とを区別して問題にしないでならない場合もある。

小論においてことさら「擬人化解釈」という用語を選択し、むしろ一般に広く通用している「擬人法」という用語を避けるのは、修辭的な表現手法としての「擬人化(擬人法)」ではなく、解釈特性としての「擬人化」を問題にしているのだということをいささかでも明確にしながら議論を進めたいがゆえである。

4. 《私-私》型非擬人化解釈の優位性

すでに述べたように、私の行った調査では、《私-私》型の非擬人化解釈の方が、《雲-空》型の擬人化解釈よりも優勢であった。この節では、その理由について考えてみたい。

「かなしい」「さびしい」という形容詞の用法について、森田(1977)はそれぞれ次のように記述している。

- (9) 「かなしい」……不幸な状況に接し、心が痛む気持ちである場合に使うが、そのような気持ちを人々に起こさせる事物にも言う。
- a. 一人称主体の感情。
 - b. 人に悲しみを与える内容の事物にも用いられる。その場合、「悲しい」はその事物の属性となる。
 - c. 具体的な悲劇的内容は含まないが、人を悲しみに沈ませるような、沈鬱で晴れやらぬ雰囲気醸し出すものに使う。(pp.166-7)
- (10) 「さびしい」……あるべきものがそこになくて、心が満たされず楽しくない状態。仲間や相手がない孤独の、物悲しくて心細い感じである。
- a. 自分自身の感情を表すのが基本。「一人ぼっちの生活はたまらなく寂しい」と言えば、寂しいのは「私」に決まっている。
 - b. だれもが寂しいと感じるような場面や状況は、寂しいことがそのものの属性となる。「寂しい夜道」は、私が寂しく感じると同時に、人にも寂しさを感じさせる条件を備えている主体ということでもある。(pp.221-2)

このように、「かなしい」や「さびしい」は、感情主体の悲しさ・寂しさを直接表出する用法と、ある物事が悲しさや寂しさを人に感じさせる属性をもっていることを表す用法とをもつ。この区別を、寺村(1982)では「感情の直接的表出」／「感情的品定め」と呼び分け、次のように記述している。

- (11) 「感情の直接的表出」の場合
- a. 感情の形容詞を述語とするコトは、
X (感情主) ガ / ニ Y (対象) ガ コワイ / ウレシイ (コト)

という形をとり、通常の独立文では、Xが主題化して、さらにそれが省略されて
(Xハ) Yガ コワイ/ウレシイ

という形の文となる。(p.150)

- b. 述語が現在形で言い切りになる場合は、Xは話し手自身(疑問文では話し相手)に限られる。(p.154)
- c. 感情主(すなわち自分自身か相手)は文中に出ないほうが多い。出るときは、「～ハ」「～ニトッテハ」「～トシテハ」のように主題の形をとり、特に取り立てる感じがある。(p.150)

(12) 「感情的品定め」の場合

- a. 感情的な形容詞を述語とする感情表出の文、

Xハ Yガ (形容詞)

の、X(感情主)が文の背後にかくれ、Y、つまり形容詞で表わされる感情の対象が主題となって、

Yハ (形容詞)

となると、それは、「一般にYがこれこれの感情をひきおこすような性格をもったものだ」という、品定め文の一種となる。(pp.151-2)

- b. そのような品定めが「誰にとって」そんなのかを表わす補語は、準必須補語と考えるべきだろう。それが文中になれば、その品定めが「一般に、誰にとっても」そうだという意味に解釈される。(p.152)

《私-私》型の非擬人化解釈では、結局、②「くもは かなしい」、④「そらは さびしい」という表現を、(11)の「感情の直接的表出」として解釈するか、あるいは、(12)の「感情的品定め」として解釈するかのいずれかとなる。それは、「くもは かなしい」、「そらは さびしい」を、次のように敷衍拡張して解釈することに相当する。

- (13) a. [私には] くもは かなしい
b. [私には] そらは さびしい
- (14) a. [私にとっては] くもは かなしい
b. [私にとっては] そらは さびしい
- (15) a. [私としては] くもは かなしい
b. [私としては] そらは さびしい

いま、学生がとった非擬人化解釈が、「感情の直接的表出」と「感情的品定め」のいずれであるかを区別することよりも、両者の解釈的類似性に目を向けることが大切であるように思われる。次の例文を見てみよう。

- (16) a. 一人で浜辺の商店街を歩くと、何だかとてもさびしい。
b. 一人で歩くと、浜辺の商店街は何だかとてもさびしい。

aが、表現に潜在している発話主体「私」の「さびしさ」を直接表出していることは明らかである。一方、bの方は、「浜辺の商店街」がそこを歩く人に「さびしさ」を誘発させる属性をもっていることを表している。しかし、やはりその「さびしさ」の第一の誘発先は、「一人で歩く」という先行表現の影響もあって、表現に潜在している発話主体の「私」であるという解釈を受ける蓋然性が高い。その意味で、aとbとは解釈的な類似関係にあるとすることができる。

同じことが、「くもは かなしい」、「そらは さびしい」についても言える。この二つの表現

が非擬人化解釈を受けるとき、それが寺村の言う「感情の直接的表出」であるのか「感情的品定め」であるのかは、にわかには決めがたいはずである。しかし、少なくとも「かなしい」や「さびしい」という感情をいだく主体や、その感情を誘発される主体が、「くも」や「そら」ではないという点で両者は共通しており、この点で擬人化解釈とは区別される。

したがって、②「くもは かなしい」の場合を例にとると、非擬人化解釈と擬人化解釈との違いは、次のようにまとめることができる。

(17) a. 「くも」を見ると、「私」(または、その「くも」を見る人)は、「かなしい」という感情をいだくか、または誘発される。(非擬人化解釈)

b. 「くも」それ自身が、「かなしい」という感情をいだいている。(擬人化解釈)

ここで、説明の都合上、①行目の「くも」を「くも₁」、②行目の「くも」を「くも₂」、③行目の「くも」を「くも₃」と表すことにする。次の通りである。

(18) ①くも₁ のある日 / ②くも₂ は かなしい

③くも₃ の ない日 / ④そらは さびしい

(17) a の非擬人化解釈においては、「くも₁」と「くも₂」との関係は、解釈上、大きな問題にはならない。この場合、「くも₁」と「くも₂」とは、「くも₂ = [そらにある] くも₁」のように同一指示関係にあると容易に理解することができる。両者は自然な結束性解釈¹⁴⁾を受けるのである。

同じことは、「くも₃」と「そら」との関係についても言える。非擬人化解釈では、④行目は「[くも₃のない日の] そらは [私にとって] さびしい」というように理解され、「くも₃」と「そら」の関係について、それ以上新たな推論が要求されることはない。

ところが、(17) b の擬人化解釈の場合は事情が異なる。まず、「くも₂」が擬人化されているとすると、まず第一に「くも₁」と「くも₂」との関係が解釈上問題になる。もし、「くも₁」と「くも₂」とが同じ雲だとすると、「くも₁がある日/くも₂は かなしい」という表現は、「自分が存在する日、自分はかなしい」ということになるわけだが、自分の存在と自分の悲しさを「くも₂」の立場でうまく説明することが求められてしまう。これは、結束性解釈の問題であると同時に、一貫性解釈の問題でもある。

また、「くも₁」と「くも₂」が同一指示関係にある雲だとする場合には、「くも₁」の存在を言うのに「ある」という動詞が使われていることも不審に思われてくる。「くも₂」が擬人化されているのならば、それと同一指示関係にある「くも₁」も擬人化されていることが期待されるからである。その場合、存在を表すための動詞としては「いる」の方がふさわしいのではないかという疑念が生じる。この問題は、述語に「ない」が使われている「くも₃」の場合も同様である。

同一指示関係だけれども「くも₂」だけが擬人化されていると言うのなら、さらに、そのような結束性解釈を有効にするための理由が求められ、全体を通しての一貫性解釈が新たに求められることになる。あるいは、「くも₁」と「くも₂」とが違う雲とした場合でも、「くも₁」と「くも₂」とがどのように区別され、また、両者の関係がどのようにになっているのかという疑問に対して、結束性と一貫性の両面から答える用意をしなくてはならない。さらに、④「そら」の擬人化にしても、「そら」と「くも₃」との関係について同様の解釈問題が生じてしまう。

第1節の表1を見ると、「くもは かなしい」の「くも」を生物の「蜘蛛」であると解釈している学生が2名いることがわかる。この2名の学生に面談して、どうして「蜘蛛」を持ち出す必要があったのかを確認してみた。どうやら、「くも₁」と「くも₂」の関係に何とかして整合的

な説明をつけようとして四苦八苦した末の解釈であつたらしい。「くも₁」が「雲」であるとする
と、「くも₂」は「雲」以外の「くも」でなくては都合が悪い。そこで「蜘蛛」が持ち出されたの
である。かなり唐突とも言えるこの解釈は、この詩に対して擬人化解釈を適用する場合に、結
束性解釈や一貫性解釈になかなか解決の難しい問題が生じてしまうということを端的に示して
くれている。あくまで擬人化解釈を持ちこたえようとする、場合によっては、「雲」ならぬ「蜘
蛛」を持ち出す必要まで出て来るのである。しかし、それはそれで、困難な解釈的状况をやが
てもたらずことになる。「雲がある日、なぜ蜘蛛はかなしいのか」という問に答えるには、「雲」
と「蜘蛛」との関係を無理なく説明するために、大幅な文脈拡張が必要になってしまうからで
ある。

以上のように、擬人化解釈の場合には、新しい問題が次々に生まれ、それを解決するための
文脈拡張が次から次に必要となる。整合的な解釈を保証するために、つじつまを合わせなくて
はならない解釈問題がいくつも発生してしまうのである。その結果、整合的で細部まで一貫し
た解釈に到達するには、相当の労力負担が要求されることになる。

それに比べると、非擬人化解釈の方が、整合的な一貫性解釈に到達しやすいと言える。第1
連と第2連との接続関係について、「Aそれと同時にB」という同列性解釈をとるにせよ、また、
「Aそれに対してB」という対比性解釈をとるにせよ、読み手はこの詩に潜在している「私」
の一定の心性に気づくことになる。それは、雲のある日は、雲のある日でかなしく、逆に、雲
のない日は、雲のない日でさびしい、という「私」の心情である。つまり、「私」は常に、かな
しいか、さびしいかのいずれかでしかない。こうした解釈に、《私-私》型の非擬人化解釈をと
る読み手は大した困難もなく到達することができる。

つまり、《私-私》型の非擬人化解釈の場合には、結束性解釈においても一貫性解釈におい
ても、擬人化解釈に見られたような解釈問題に苦しめられることなく、整合的な解釈を得るこ
とができるのである。《雲-空》型の擬人化解釈よりも、《私-私》型の非擬人化解釈の方が優勢
であるのは、このような事情によるものと思われる。

5. 擬人化解釈と非擬人化解釈の類似性

前節での検討によって、非擬人化解釈の方が、擬人化解釈に比べて無理なく整合的な解釈が
得られるということがわかった。私の調査では、《私-私》型の非擬人化解釈が42.4%であつた
のに対して、《雲-空》型の擬人化解釈が28.5%であつた。確かに数の上では前者が優勢である。
しかし、それは、必ずしも圧倒的な優勢と言えるほどでもない。

ここで見失ってはならないことは、一つの詩に対して複数の解釈が併存しているという事実
である。こういう事実を前にした時、すぐに、ある特定の解釈を称揚したり、あるいは、攻撃
したりする姿勢をとることは慎重になりたいというのが私の考えである。前節で触れた「蜘
蛛」を持ち出す解釈などは、多くの人に一笑に付されるかもしれない。しかし、「蜘蛛」を持ち
出した学生には、それなりの解釈の道筋があり、それはこの詩に対する擬人化解釈が逢着する
解釈問題をかえって鮮明にしてくれていた。このように、対立しながらも併存している解釈を
一つに総合する観点がないかどうかを吟味してみることは、解釈を相互に比較する場合には重
要である。この節ではその点について考えてみる。

ここで再び、「かなしい」「さびしい」という形容詞の語彙統語的な特性に立ち戻ってみよう。「かなしい」「さびしい」に限らず、感情を表す形容詞について、次のような特性が指摘されることがある。

(19) 自発的な感情・感覚を表す形容詞を終止形のままで言い切りに用いると、話し手自身の感情や感覚を表すということはよく知られている。(森田 1985: 3)

「かなしい」「さびしい」などの形容詞が終止形・言い切りで用いられたときに、感情主体として想定できる範囲が局限されるという特性は、しばしば「感情形容詞の人称制限」と呼ばれている。

「くもは かなしい」「そらは さびしい」に対して擬人化解釈を行うとき、当然この「人称制限」は解釈的に乗り越えられている。擬人化解釈においては、「くもは かなしい」と述べる発話主体「私」は、いわば「くも」の立場にわが身を置き、「くも」と一体化することで、「くも」の心情を直接表出していることになる。これは、「くも」が「私」に投射され、「私」が「くも」に転移しているのだと言ってもよいだろう。このような捉え方は、いわゆる「語りの視点」の捉え方とも共通している。

ところで、語用論では、「わたし」「あなた」／「いま」「さっき」／「ここ」「あそこ」のような表現を、「ダイクシス表現(deictic expression)」と呼んでいる。ダイクシス表現は、その表現を個別的・具体的に解釈する際に、発話状況に関する情報を参照することが必要となるような特性をもっている。「ダイクシス(deixis)」は「直示(性)」と訳されることもあり、一般に次のように規定されている。

- (20) a. 「発話の行われる場面との関連においてのみ了解が成り立つような言語表現の特質」(荒木 1992: 393)
- b. 「一定の発話状況に依存している、発話の人称的側面、場所的側面、時間的側面と関係する言語表現がもつ特徴的機能」(Bussmann 1996: 117)
- c. 「発話が発生している状況と関わる、人称や時間や場所という特性を直接に指示する言語の性質を包摂して言う用語」(Crystal 1997: 107)

ダイクシスは、「人称ダイクシス(person deixis)」、「時間ダイクシス(temporal deixis)」、「場所ダイクシス(spatial deixis)」の三者に分類されるのが一般的である。この場合、ダイクシスの基点(deictic center)となるのは、〈いま〉〈ここ〉〈わたし〉である。発話にはこの三者が常に潜在している。したがって、語用論的な解釈を行う場合には、ダイクシスの基点となる〈いま〉〈ここ〉〈わたし〉に関する個別化や具体化が必要となる。

そのダイクシスの基点に対して、意図的な操作が行われることもある。そのような操作は「ダイクシス投射(deictic projection)」と呼ばれる(Yule 1996: 13)。ダイクシス投射は、ダイクシスの基点である〈いま〉〈ここ〉〈わたし〉の具体値を、発話時・発話場面・発話主体という本来の値からあえてずらすことである。例えば、留守番電話の「ただいま留守にしております。」というメッセージの場合、これを録音した人は「ただいま」というダイクシス表現が示す具体値を、誰かが自分の留守中に電話をかけてくれた時点であると想定しているはずである。歴史的現在を用いた物語、空想空間を舞台にした小説、二人称で書かれた詩など、文芸作品にはダイクシス投射という特性が創造的に利用されることが少なくない。

物語作品における「語りの視点」も、語用論的には人称ダイクシスの投射という表現機構・解釈機構の問題として捉えることが可能である。ただし、物語作品では投射関係が二重に構成

されていることが多い。一方では、作家自身と作品中に仮構された語り手との間に投射関係が認められ、もう一方では、その語り手と作品中の登場人物との間に投射関係が認められる、という具合である。そのため、物語作品における「語りの視点」の問題¹⁵⁾は、しばしば複雑な様相を呈する。

いま、説明を単純化するために、八木重吉の「雲」という詩について、そのような二重の投射関係は問題にしないことにしよう。この詩に対する擬人化解釈とは、「くもは かなしい」の「くも」に、潜在している発話主体「私」の人称ダイクシスを投射し、「そらは さびしい」の「そら」にも「私」の人称ダイクシスを投射させることで成立する解釈であると言することができる。その結果、「くも」も「そら」も、「私」に相当する表現として臨時的に取り扱うことが可能となる。「かなしい」「さびしい」の人称制限を解釈的に乗り越えることができるのは、そのおかげである。

だとするならば、ここで一つの見方が可能になってくる。それは、擬人化解釈にあっても、「かなしい」という思いや「さびしい」という思いをいだいている主体は、結局のところ、この詩に潜在している「私」ということになるのではないかという見方である。なぜならば、「くも」や「そら」は「私」に投射されており、「私」は「くも」や「そら」に転移していると思わせるからである。この見方は、これまで対立的に取り扱ってきた擬人化解釈と非擬人化解釈とを取り結ぶ役割を果たしてくれる。というのも、この見方によれば、一見相反した擬人化解釈と非擬人化解釈との間にも、互いに明確には分離できないような解釈類似性があるということになるからである。

このように、いったんはまったく相容れないに見える解釈も、互いに解釈的な類似性をもっているということがありうる¹⁶⁾。したがって、解釈の可能性を問題にすると、対立する複数の解釈を単に対照し、単に併置するだけでは不十分である。対立の要因がどこに求められるのかを分析し、その分析を通じて、対立の背後にある総合の可能性を探ることが、解釈可能性を吟味する上ではむしろ重要なのである。

6. 解釈の可能性と優先度

以上、小論では、八木重吉の詩「雲」の解釈を事例として取り上げて、解釈の可能性と優先度について語用論的観点から分析を行ってきた。この個別的で具体的な分析を契機にして、私が問題にしたいことは、解釈可能性と解釈優先度に関する一般の問題である。以下、その点について述べて、小論のまとめとしたい。

語用論においては、言語使用の実現態・可能態を観察・省察の対象として、その使用条件を解明することが目指されている。使用条件のすべてが、言語そのものの構造や体系によって内部的に規定される場合は、語用論がその独自性を発揮することはない。この場合は、言語構造に関わる領域（音韻論、形態論、統語論、語彙意味論等）で十分処理可能だからである。これらの領域が問題にするのはもっぱら「コード化(encoding)」と「コード解読(decoding)」の問題であり、「解釈(interpretation)」の問題は、その一部分しか論じられないのが普通である。

これに対して、語用論がその独自性を発揮するのは、言語使用の条件が、言語の使用者や使用場面によって規定されるような場合である。言語使用の語用論的条件は、大きく二つに分け

て考えることができるように思う。第一は、個々の言語使用者が有する認知的条件である。ここでは、使用者一人ひとりの認知資源と認知機構の個別差が、言語の使用条件に影響を与える。また、第二は、個々の言語使用者を取り巻く社会的条件である。個別的な対人関係から文化的・民族的な慣習にいたるまで、さまざまな社会的条件が言語使用のあり方を規定し制約する。

したがって、語用論は、言語使用の実現態と可能態とに即して、(a)言語そのものの構造的条件、(b)使用者が有する認知的条件、(c)使用者を取り巻く社会的条件、この三者が、どのように言語使用の条件として機能しているかを記述し説明する研究領域だということになる。語用論では、構造的条件・認知的条件・社会的条件の力動的な三項関係が問題にされなくてはならないのである。

それゆえ、解釈可能性や解釈優先度という問題を考えるとき、そこにも三つの側面があることになる。第一は、構造的条件から導かれる解釈可能性や解釈優先度であり、第二は、認知的条件から導かれる解釈可能性や解釈優先度であり、第三は、社会的条件から導かれる解釈可能性や解釈優先度である。

第1節で掲げた表1を見ると、八木重吉の詩「雲」に対して172名の学生が広がりのある解釈を見せていた。回答数がきわめて少ない解釈パターンも含めると、10通りのパターンが見られたことになる。しかし、重要なのは、だからといって一人ひとりの学生がそれぞれ10通りの解釈パターンを思いつくというわけではないという点である。

特に何も指示を与えなければ、ほとんどの学生は、調査票に対してただ一通りの解釈しか記さないものである。「他の人なら別な解釈をするかもしれないというものがあったら、併記してほしい」という指示を出した場合でも、すぐに第二の解釈に思い至る学生はそれほど多くはなかった¹⁷⁾。第二の解釈が出たとしても、第三、第四の解釈がすらすら出てくることはまずない。

このことは、複数の人の解釈を横断的に見比べたときに検出される解釈可能性の広がりとは、個人の内部で自覚される解釈可能性の広がりとは、区別して論じられなくてはならないということを示している。

個々の解釈者にとっては、最初に思い浮かべられた解釈想定がいわば絶対的な優先度をもつのが普通であって、最初の解釈をいったんキャンセルして、第二、第三の解釈を想定し直すためには、そのキャンセルを引き起こすための動因が必要である¹⁸⁾。換言すれば、個人の認知的次元では、第一に得られた解釈が、いわば絶対的で特権的な位置を占めており、解釈可能性の広がりはいくまでも潜在的可能性という域に留まるのが通常だということになる。それは、自覚的な省察によって初めて顕在化する。

ところがその一方で、言語理解を左右する認知的条件には、多様な個人差がある。そのため、どういう解釈を優先的に想定しやすいかについても、その傾向に個人ごとの偏りがある。個人個人の認知的条件のばらつきに応じて、集団の中では解釈の広がりや、解釈の対立という形で顕わとなる。したがって、集団という社会的次元では、複数の解釈が顕在的に観察されるとともに、個々の解釈は相対的な優先関係を競うことになるわけである。

八木重吉の詩「雲」について、一人ひとりの解釈を調査した教室では、自分が予想もしなかった解釈が他の人から出されたことに驚く学生が多かった。しかし、その驚きが、自分の解釈に対する内省を引き起こし、この詩の潜在的な解釈可能性に注意を向ける契機となる。私たちは、自分の解釈と他人の解釈との違いに目を向けることによって、自分自身の内部に潜在的に眠っ

ている解釈可能性の広がりを実感することができるのである。

以上のような見方を簡略にまとめると、次の表3のようになる。

	認知的次元	社会的次元
解釈可能性	潜在的な解釈が省察によって自覚される	顕在的な対立が観察によって検出される
解釈優先度	特定の解釈が絶対的で特権的な位置に立つ	複数の解釈が相対的に併存する位置に立つ

表3 解釈可能性と解釈優先度

注

- 1) 高本 (1994a・b, 1995, 1996a・b, 1997) 参照。これらは、それぞれ独立した個別的・具体的な事例分析ではあるが、解釈の可能性と優先度のせめぎ合いという問題を一貫して語用論的観点から取り扱っている。
- 2) したがって、詩の解釈を取り上げるとはいえ、小論は、その文学的研究や文芸的批評をめざすものではない。また、一定の教育的価値観を背景にして、解釈の方向や方法を規定しようという意図もない。
- 3) 『八木重吉全集第三巻（初期詩稿・日記他）』（筑摩書房、1984年）巻末の年譜によれば、八木重吉は1898年（明治31年）に東京府南多摩郡界村相原（現・東京都町田市相原町）に生まれた。1927年（昭和2年）死去、享年29歳。
- 4) 「雲」は、八木重吉が生前に刊行した唯一の詩集『秋の瞳』（新潮社、1925年＝大正14年）に収められている。本文は、『八木重吉全集第一巻（詩集秋の瞳・詩稿I）』（筑摩書房、1984年）所収本文に拠った。用語・用字・組みは、詩集『秋の瞳』初版と同じ。
- 5) 調査は5回にわたって行った。調査日と調査対象は次の通り。(1)1996年12月10日、平成8年度「国語学特論I」受講学生対象、(2)1997年1月14日、平成8年度「国語学講読I」受講学生対象、(3)1997年4月16日、平成9年度「国語（書写を含む）」受講学生対象、(4)1997年4月22日、平成9年度「国語学概説」受講学生対象、(5)1997年4月25日、平成9年度「国語学講読II」受講学生対象。ただし、以上5つの授業のうち2つ以上を重複して受講している学生の調査票については、そのうち最初に提出されたものだけを集計対象とした。
- 6) 感情主体としては、「作者」「八木重吉」「雲や空を見上げている自分自身」などと答えているものは、すべて「私」の項目にまとめた。
- 7) Sperber and Wilson (1986) の用語 'explicature' の訳語。表意は、発話形式をコード解読して得られる論理形式を発展させて得られる想定である。表意の解釈過程には、曖昧性解消 (disambiguation)、指示特定 (reference assignment)、敷衍拡張 (enrichment) など、文脈を用いた推論処理が必要となる。表意の解釈過程については、高本 (1994a, 1995, 1996a) で述べているので参照されたい。

- 8) このように連体節の中に置かれた主格名詞句は、「が」によっても「の」によってもマークできるが、これを現象的に「ガノ可変」(三上 1953)とか「がーの交替」(柴谷 1978)と呼ぶことがある。
- 9) 高本(1994b)では、童謡「ぞうさん」の歌詞の解釈について、作者まど・みちおが意図した解釈が伝わりにくい一つの要因として、表現形式の平行性が解釈処理操作の平行性に直結しやすいという点を指摘した。
- 10) 表1を見ると、「かなしい」という感情の主体として「空」を挙げた学生が3名、「太陽」を挙げた学生が1名いる。これらの学生は、平行性解釈と擬人化解釈の両方を何とか保持しようとしているのだと見なすことができる。
- 11) 古代ギリシア語、ラテン語に由来する用語で、「顔／人間に擬して作ること」という意味。
- 12) 原文は、'we project [the world of nature] into the qualities we recognize in ourselves.'
- 13) 原文は、'the characteristics of a human subject are transferred to an inhuman object.'
- 14) 結束性解釈については、高本(1997)参照。
- 15) 高本(1997)では、川端康成の「伊豆の踊子」について、川端自身が犯した「語りの視点」の不整合性が、表現に顕現していない主格名詞句の解釈に大きな影響を与えているという見方を示した。
- 16) この問題は、高本(1995)でも論じている。
- 17) ただし、私の授業をすでに受講していて、解釈可能性の自覚的拡大の訓練を経験したことのある学生は別である(と信じたい)。
- 18) この認知的規制の事実に対して説明を与えた理論として、Sperber and Wilson (1986-95)の「関連性理論」がある。

参 考 文 献

- 荒木一雄・安井稔〔編〕(1992)『現代英文法辞典』,三省堂。
- 大塚高信・中島文雄〔監修〕(1982)『新英語学辞典』,研究社。
- 柴谷方良(1978)『日本語の分析』,大修館書店。
- 高本條治(1994a)「何が旅ごころを誘うのか—JR 広告コピーの語用論的分析」,学苑 650。
- (1994b)「『おはながながいのね』の解釈—まど・みちお『ぞうさん』の語用論的分析」,『森野宗明教授退官記念論集 言語・文学・国語教育』,三省堂。
- (1995)「カワセミは飛んでいるのか?—川端茅舎句『翡翠の影こんこんと溯り』の語用論的分析」,上越教育大学研究紀要 14-2。
- (1996a)「蟬がなきだすとお礼が口をつく事情—柳句『せみがなき出すとお世話に成りました』の語用論的分析」,岡山大学国語研究 10。
- (1996b)「『窓』をとおして見えるもの—『枕草子』における『窓』用例の語用論的性格」,上越教育大学研究紀要 16-1。
- (1997)「ただうなずいて見せた人—川端康成『伊豆の踊子』の語用論的分析」,上越教育大学研究紀要 16-2。
- 田中春美〔ほか編〕(1988)『現代言語学辞典』,成美堂。
- 寺村秀夫(1982)『日本語のシンタクスと意味 I』,くろしお出版。

- 三上 章 (1953)『現代語法序説—シンタクスの試み』, 刀江書院. [再刊: くろしお出版, 1972年]
- 森田良行 (1977)『基礎日本語 I』, 角川書店.
- (1985)『誤用文の分析と研究—日本語学への提言』, 明治書院.
- Bussmann, H, 1996. *Routledge Dictionary of Language and Linguistics*. Trans. and eds. G. Trauth and K. Kazzazi. Routledge.
- Crystal, D. 1997. *A Dictionary of Linguistics and Phonetics*. Fourth Edition. Blackwell.
- Grundy, P. 1995. *Doing Pragmatics*. Edward Arnold.
- Lanham, R. A. 1991. *A Handlist of Rhetorical Terms*. Second Edition. University of California Press.
- Leech, G. N. 1969. *A Linguistic Guide to English Poetry*. Longman.
- MacLaughlin, T. 1995. 'Figurative Language.' In F. Lentricchia and T. MacLaughlin (eds.) 1995. *Critical Terms for Literary Study*. Second Edition. The University of Chicago Press.
- Preminger, A. (ed.) 1986. *The Princeton Handbook of Poetic Terms*. Princeton University Press. [Revised edition of *Princeton Encyclopedia of Poetry and Poetics*, Enlarged Edition, 1974. (Original edition, 1965.)]
- Sperber, D. and D. Wilson. 1986. *Relevance: Communication and Cognition*. Blackwell. [内田聖二 (ほか訳)『関連性理論—伝達と認知』(研究社出版, 1993年)]
- 1995. *Relevance: Communication and Cognition*. Second Edition. Blackwell.
- Wales, K. 1989. *A Dictionary of Stylistics*. Longman.
- Yule, G. 1996. *Pragmatics*. Oxford University Press.

Whose Sadness, the Cloud's or Mine. A Pragmatic Analysis of 'Kumo' by Jûkichi Yagi.

Joji TAKAMOTO*

ABSTRACT

The poem 'Kumo' ('The Cloud') written by Jûkichi Yagi, has a certain lexico-syntactic property which admit ambiguity into its interpretation.

I have done serial surveys in my classrooms, in order to investigate how widely my students construe this poem. The survey revealed the fact that my students did construe this poem both in personifiable way and in non-personifiable way. And, several students selected the mingling way; i.e. the personifiable reading was adopted for the first stanza, but non-personifiable reading for the second (and vice versa).

In this paper, I report my survey data in detail and discuss the interpretive potentiality of this poem from the viewpoint of linguistic pragmatics. Through that, I argue an important problem of pragmatics; the problem of confrontation between interpretive potentiality and interpretive priority.

* Division of Language, Department of Japanese Language